

遠い母の物語

—— サラ・ポーリーの『物語る私たち』

安川有果 (映画監督)

女優で映画監督のサラ・ポーリーが撮った『物語る私たち』は、彼女自身の出自の秘密に纏わるセミ・ドキュメンタリー映画である。サラの母親で舞台女優でもあったダイアンは、サラの幼少時に病気で亡くなったのだが、子供たちにひとつの秘密を残したまま去ってしまった。サラは、父も母もそうではないのに一人だけ赤毛だった。幼い頃、そのことを冗談めかして「サラは父親が違うんじゃないか？」と長男が言い、周囲もサラ本人もそんなことあるはずがないと笑っていたのだが、それが真実だったことが明らかになっていく。

この映画の中のサラ・ポーリー自身の存在感は驚くほど薄い。ダイアンを知る人物達へのインタビューでも、サラは誰かの意見に加担も否定もせず、ただその人物にとっての真実を聞き出すことに努めている。サラ自身のダイアン像について触れられることもない。

『物語る私たち』は、サラの両親をめぐる真実を探るドキュメンタリーとして始まるが、徐々に物語ることそれ自体がドキュメンタリーの核となっていく。映画監督であるサラの関心は、出来事をどのように語るかに向けられ、セルフ・ドキュメンタリーになることを徹底して避けているようでもある。

私が以前監督をした映画『Dressing UP』(2012)も、主人公が自らの出自にまつわる秘密を探って行く物語だったが、『物語る私たち』とは異なり完全なフィクションである。主人公の母親が既に亡くなっている点は『物語る私たち』と共通している。『Dressing UP』の主人公は、生前の母親の得体の知れない過去を探求しながら、母親と同じ行

動を起こしていく。

私は、フィクションが持つ想像力に賭けて、母親を追いかける娘の像を描いた。それはフィクションに与えられた使命のひとつとと思っている。だが、サラ・ポーリーはドキュメンタリーという手法の中で、カメラの前に自分自身と母親を置いた時、二人の間に決定的な距離を構えた(それは死よりも遠い距離といえる)。そしてカメラとともに模索を続けた結果、物語り方に腐心する、というひとつの映画的回答に辿り着いたのだろう。

ダイアンの夫で、彼女亡き後サラを男手一つで育て上げた父親のマイケルは、ダイアンについて述懐する。「彼女の原動力は、人生を思いっきり楽しみたいというバイタリティと断固とした決意だった。自分にはとても真似できなかった」。

絵の中にいる人物は、描かれていることに気付いていない——何かの小説に書いてあった言葉で、なるほどと思った。『物語る私たち』の冒頭、「物語の渦中にいる時はまだ物語の体をなさずただの混乱だ。竜巻に巻かれた家にいる気分。止める手だてはない」と、マイケルのナレーションで語られる(マーガレット・アトウッドの小説『またの名をグレイス』の引用)。竜巻の中にいる人物は、いつかこのことが誰かに記憶され、物語になることなど考えないし、ただ目の前の出来事に必死に向き合っているだけだ。インターネットやSNSの出現により、自分を外から見ること慣れ親しんでいる私たちの中には、絵(竜巻)の中で人生を全うした彼女の生き様を羨ましく思う者も多いのではないだろうか。私はちょっと羨ましい。大変そうだけど。